

---

# 異世界の勇者様！？

如月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界の勇者様！？

### 【コード】

N0992T

### 【作者名】

如月

### 【あらすじ】

なぜか異世界の勇者になった立花大介の八チャメチャストーリー！？  
モンスターに強いのは出ませんよ。  
とりあえずチートな勇者と魔法使いが暴れます！

小説初挑戦です。いつ更新するかわからないのでご注意を。

トリップ、しました。

今日は朝から何かとツいてない。

寝坊するし、家には誰もいない。

授業では当てられたところが全くわからん。

学食混んでメロンパン買えなかったし。

それに加えて異世界トリップだ!?

やってらんねえよこんなの!

「もしもーし、その人間!魔王様の領土で何してる!」

どうやらモンスターらしい。

玉ねぎに体くつつけたみたいなのが回転してる。

なんか殴りたくなってくるなあ。

「来いよ。相手してやる。」

飛びかかってきたから腕をつかんで投げ飛ばしてやった。

相手の方がでかいけど気にしない。

逆に力を利用してやればいい。

「人間のクセに生意気だ!でべそんあたーつく!」

「ひらがなかよ!?モンスターのクセに生意気だ!」

どうやらあれはでべそんというらしい。

とりあえず体当たりしてきたが、少し横によけて鳩尾に一発入れてやった。

「ぐえっ、なんでそこが弱点だとわかった!?」

「そこが弱点だったの！？てか弱すぎ！！」  
「む．．．無念．．．．．。」

その瞬間、でべそんが土くれになった。  
ありえないぐらい弱かった。

ふと周りを見ると、モンスターの大群に囲まれていた。  
全部相手にしてたらきりがないだろう。

「三十六計逃げるにしかず、だ。さいならっ！」

数が少ない所を縫うようにして走り、全速力で逃げた。  
足には結構自信がある。

思いつきり走ってたら町みたいなところに着いた。  
なんかお祭り騒ぎだなあ。

「なあ、何かあったの？」

「勇者様がこの町に来るんだって！巫女様が言ってた！」

「へえ、どんなやつ？」

「黄色いシャツを着てて、青い帽子をかぶってるの！右手に黒いリ  
ストバンドしてて．．．。」

丁度オレも同じ格好をしてる。  
なんかとてつもなく嫌な予感がしてきた。

「名前は立花大介！」

「オレかよ！？」

とりあえずオレが勇者らしい。

## 国王と1対面

この町は城下町だったらしい。

オレを見つけた町民たちに無理やり城まで引つ張っていかれた。

「痛い、痛いってば！はーなーせっ！！」

「国王陛下！勇者様をお連れしました！」

国王っていうと髭がめっちゃ目立つおっさんだと思っただろ？

なんと、かなりのイケメンだ。

まだ二十代だって。

「ようこそおいでくださいました。私はロジャーと申します。」

「そんなかしこまらなくてもいいよ。オレは・・・もう知ってると思うけど、立花大介だ。よろしく。」

ロジャーの話によると、魔王率いるモンスターが暴れているらしい。オレが戦った奴は最弱クラスのモンスターだそうだが、でもあんまりにも弱すぎる。

「とりあえず、魔王を倒せばいいんだな。」

「そうですね。出来れば穏便に済ませたかったのですが。」

「なにかあったのか？」

「いえ、見せしめだとか言っただけで村を一つつぶされたので・・・。」

なんだか未恐ろしい奴だな。

当たり前って話だけど。

「あ、あと少しで魔法使い様もいらっしやいます。」

「異世界人で青いジャージ着てるとか？」

「はい、その通りです！名前は・・・立花太一様です。お知り合いですか？」

「オレの兄貴だよー！！！」

どうやら兄貴もきちまうらしい。

オレは4人兄弟だが、全員集合もありえるのかもしれない。

**まさかの出来事（前書き）**

かなり遅れました。  
のぺりいくよー

## まさかの出来事

あれから五分後。

「だーいーすーけえええー!!」

「ぎゃーーー!!?来るなー!!」

猛スピードで突っ込んできて、タックルをくらわされた。太一はものすごい笑顔でくっついてくる。

「ひどいなあ、2日も帰ってこないなんて。」

「え?そんなに時間たってるの?」

この世界と向こうでは、時間の流れが違うらしい。早く帰らないと数百年後とかになっちまう。

とりあえず太一も来たし、とっとと終わらせないと。

「で、どこに行けばいいんだ?」

「ここから北へ300kmのところにある、魔王城です。」

「300km!?!ありえねえ!」

帰る方法もわからないので、進むしかないだろう。でもオレたち武器とかもってねえ。

「あのさー、武器くれないかな?」

「すみません、用意には時間がかかります。」

「どのくらいだよ?」

「一週間ほどでしょうか。防具とかも用意させてるので。」

一週間となると向こうじゃかなり時間がたちまう。  
てか、兵士とかが持つてるそれでいいだろうが！

「ああ、勇者様なら魔法で武器が出せるはずですよ！魔法使い様は魔法でいけるはずですよ。」

「それを先に言えよ！太一、とつとといこうぜ。」

「アーハハハハ！。で、どこ行くの？」

「話聞いておけよ！北に300km進むんだと。」

「ていうか、ここどこなの？」

「そこからかーーーーー！！！」

話を聞かない兄を持つと本当に疲れる。  
とにかく出発することになった。

## 風の如く

だだっ広い草原を突っ切って山の方へ向かう。  
身体能力が上がっているのか、メチャメチャ速く走れる。

「大介、体が軽いや。なんか空も飛べそうだよ！」

「飛んでけえ！鳥につつかれてしまえ！」

「みてみて〜、飛んでるよ〜。」

風を上手く操ってふわふわと宙に浮かんでいる。

ただ、かなり低空飛行だが。

オレもなんとなくジャンプしてみたら、雲に手が届くくらい高く飛んだ。

不思議と寒さは感じなかった。

「このままギューンと加速したら面白いよね。」

「太一、向こうの街まで競争しようぜ！」

「僕が勝ったらアイスおごってね。」

「オレはプリンがいい。苺ミルクでもいいけど。」

太一とオレは同時に加速した。

オレの方がかなり速いみたいだ。

太一をどんどん引き離して、あっという間に街に着いた。  
なんだか乗り物酔いみたいな感覚が襲ってくる。  
しばらくして、太一も街に着いた。

「大介？どうかしたの？」

「いやあー、なんれもないよあ。」

「あ、乗り物酔いしてる？水もらってくるよ。」

昔から酔いやすいみたいで、すぐ気持ち悪くなる。  
校外学習なんてほとんどバスで寝てた。  
これでもマシになった方だけだ。

「はい、水飲んで。あと薬も。」

「ありがとう。ていうか、この薬大丈夫なのか？」

「酔いに効くつておじさんがくれた。」

「止めとけよ……。」

酔い止めは飲まなかったが、だいぶよくなった。  
辺りはもう薄暗くなっている。

「日が暮れてきたねえ。おなかすいた。」

「それより宿探さないと、野宿するの？」

「いいね。モンスターに襲われて一晩中起きてましたとか。」

「良くねえよバカ!!」

とはいえ、寝てる暇も無いかも知れない。

夜通し歩くつもりはないが。

チヨ ボとかいらないかなあ。

## 小さい物も大きくなれば手強い

「かなり遠くまできたねえ。」

「ふぁ．．．．．ねむ．．．．．」

「寝てもいいよ？ただし永久の眠りだけだな！はーっはっはあー！」

とりあえずこのテンション高すぎのバカは無視しておきたい。  
多分太一も眠いんだろう。

眠いとテンションあがるやつは正直苦手だ。

こちらら眠いんだよ、バカやろう。

「もう無理．．．．．おやすみなさあい。」

「ちよつと大介！こんなところで寝ないですよ。」

「じゃあどこで寝るのさ？」

「知らん！」

なんか勝ち誇った顔でオレをみてる。

そこは威張るところじゃないだろう。

ツッコミをいれようとした瞬間、太一に投げ飛ばされた。

「うわああつ！？な、なにすんだよ！？」

「んー？いや、毒虫がいたからさあ。」

オレがいたところを見ると、でっかい蠍がいた。  
大体1mくらいあるかな。

てか、どんだけでかいんだよ！

何で気付かなかったんだろう。

なぜか太一には目もくれず、オレに突っ込んでくる。

「大介、そつちいったよー。」  
「えっと、んーっと、なんか武器とか……………」

銃とか飛び道具は弾かれてしまうだろう。

蠍は甲羅が硬いから甲羅の隙間を攻撃できるものでないと意味が無い。

それでいて攻撃力の高い武器なんてあったっけ？

蠍はもう目前に迫ってきている。

ふと脳裏にある武器が浮かんできた。

刃先にむかってだんだん鋭くなり、リーチが長い伝統の武器。

「日本刀だあ！！」

手を前に突き出し、その形をイメージする。

イメージが固まると空中に魔方陣が現れた。

それに手を突っ込み、中から引っ張り出した。

刀身が蒼く煌めき、甲羅の僅かな隙間に突き刺さる。

ものすごいスピードで突っ込んできた蠍は止まれるわけがない。

一瞬で真つ二つになった。

「アーハハハハー、大介すごい。」

「なっ、なんかでた！なんか魔方陣でた！！」

「落ち着きなよー。向こうから敵がきてるんだから。」

「……………は？」

「数も多いし、ぼさっとしてたらやられちゃうよー？」

日本刀じゃ無理があるよなあ。

バズーカに切り替えようか。

## 剣と魔物と死神と

魔物の大群が見えてきたが、あれは大群どころじゃないと思う。まるで雪崩のように見える。

ふと太一の顔を見ると………笑ってる！？  
しかもめっちゃ黒い笑顔だし。

「た、太一？どしたの？」

「ふふ、いやあ何でもないよ？ただちよつと楽しくなって来たなって思ってる。」

そういうと太一は右手を前に出し、魔方陣を出した。

すっごい魔法でも使うかと思いきや、巨大な鎌を取り出した。

死神が持つてるようなあれ。

青ジャージ姿の死神って何だか笑える。

あ、いけねえオレも何か武器出さないと。

ベル ルクの主人公が使ってるくらいでかい剣を想像した。

普通あれって重すぎて持ち上がらないって話だけど、軽々持ち上がった。

さすが魔法だな。

「大介、そんなの振り回せるの？かなり重そうだけど。」

「いや、楽勝だよ。って何その黒い笑顔！？」

「そろそろあいつらに天使を呼んであげようかな、と。」

「死神のクセに天使を呼ぶの？」

「殺陣開始ってことだよ。」

「殺陣ってなんだよ殺陣って。」

オレの質問には答えずに、敵に突っ込んでいった。

思いつき振り回すと簡単に魔物をまとめて倒せる。  
太一、すっごい楽しそうに殺してるよ。  
罪悪感とか無いんだろうな。

「さて、オレもやるかな。」

魔物の群に突っ込み、ぐるんつと一回転。  
それだけで魔物は土になって崩れ去る。

何も考えず、動くもの（太一以外）をすべて動かなくなるまで殺し  
尽くす。

まるで命令された事を忠実にこなす機械みたいだ。  
気付けば朝になり、オレと太一以外何もいなかった。

「目は覚めた？」

「へ？どうかしたの？」

「多分半ばトランス状態でやってたんじゃない？」

「そう……なのかな？」

「僕が呼んでも反応なかったから、変だなって思って。」

「ごめん、全然覚えてない。」

「いや、悪いって訳じゃないよ。普通生き物を殺すなんて気が滅入  
るからね。」

「太一はすっごい楽しそうだったけど？」

とりあえず疲れた。

ちよっと気を抜いたらすぐ睡魔に襲われ、そのまま眠った。

## 剣と魔物と死神と（後書き）

面倒なのでモンスターを魔物に変更しました。  
笑う死神っていいですね

## 大介の受難

なんか世界がぐらぐら揺れてる。

うつすらと目を開けると、自分の腕と地面が見えた。

腹のところに太一の腕が見えることから、太一に運ばれているようだ。しかも小脇に抱えているから地面ストレスだ。

「ふええっ！？た、太一、自分で動くから下ろして！」

「こらっ、暴れるな！今はそんなことしてる場合じゃない！」

いつになく真剣な太一に、それ以上なにも言えなかった。

あー、せめて持ち方くらい変えてくれないかな？

なんとなく振り返ると、後ろからヤバそうなヤツが来ていた。

白タイツに王子様のな格好のただならぬオーラを発するキモイ男。

絶対ナルシストのウツトリ野郎だ。

しかも両足揃えてピンと伸ばし、少し地面から浮いて横移動中。

強そうという意味ではなく、キモすぎるといっ点でビビった。

とりあえずオレたちに近づかないで欲しい。

「太一……あれ何？」

「目が腐るから見ちゃいけないよ。」

「うん、わかった。」

うん、太一の反応はあつてると思う。

あんなキモイの今まで見たことないもん。

ああいうキモイのはとつとと世界からいなくなればいい。

そもそも存在自体許されないんだよ！

隕石にぶつかって死ね！

……そう思った瞬間、本当に隕石がクリーンヒットした。

「・・・・・・・・今の太一の仕事かな？」

「多分・・・・・・・・そうだと思う。」

「でかした！よくやった太一！！お前はいい子に育ったな！」

「や、やめ、苦し・・・・・・・・」

「あ、ごめん。」

太一はかなり嬉しそうだ。

ものすごく気持ち悪かったんだろう。

「まだ・・・・・・・・まだ終わってないよ・・・・・・・・」

「ん？太一なんか言った？」

「ボクの美しい顔に傷をつけやがって・・・・・・・・」

「太一、ごめん。まだあれ死んでない。」

「せっかくボクのお嫁さんにしてあげようと思ったのに！」

「・・・・・・・・は？どっちを？」

「もちろん小さい方の君さ。抱えられていた方の。」

「太一・・・・・・・・オレ死にたいよ。」

なんかアレキ　ガイのガチ　毛野郎みたいだ。

しかも太一ゲットはオレだ。

太一を選んでてもあれだけど、オレ一応12歳。

シヨタ属性も含まれてる。

シヨタコンガチ　モウツトリ野郎ってこと！？

キモすぎて話にならない。

おおっと、太一が殺気を放ってる。

アイツの人生オワタ。

## 太一、振り返る。

アーハハハハー 太一だよー。

急に大介が帰って来なくなっただからびっくりした。

大介かわいから誘拐されてたらどうしよう。

とか考えてたら変なとこに来ちゃった。

とりあえず街の人に話を聞くと、大介もここにいるらしい。  
でっかい建物の前まで来ると大介の気配が！

なんかよくわかんないけど、家に帰れないみたい。

魔王って奴を倒せば帰れるってことかな。

そうと決まればやるっきゃない！

完膚なきまでにぶちのめして、いたぶって．．．ふふ。

え？どうしたの大介？あ、待って逃げないで。

この世界って本当に面白い。

空も飛べるし、魔物もいっぱいいる。

魔法って本当にあるんだね。

でも僕は死神っぽく鎌を振り回すのが楽しくて。

それにしても、大介いつの間にあんなに強くなっただる。

この間なんてうちの猫にすら負けてたのに。

あ、シャンプーしてただけだ。

猫は濡れるのが嫌いだから。

大介の寝顔をみていると、めっちゃ嫌な気配が。

振り向くと．．．言葉では言い表せないキモイのがいた。

「なんてかわいい子なんだ！ボクの花嫁決定！」

「．．．．．は？何言ってるんだよ？」

「ん？ああ、お前の事じゃないから。」

とりあえず大介をコイツから離さないと。  
汚らわしい手で触らせたくない。

「あつ！ボクの花嫁を返せ！！」

「絶対渡さない！汚らわしい！」

「なっ……この美しいボクになんてことを！！」

「脳みそ膿んでるんじゃない？お前がイケメンならハゲたおっさんでもイケメンに見えるっつーの！！」

「ボクはハゲてないぞ！！」

「うっせーな！爺さんになれば自然と抜けてくんだよ！」

ガーンって感じの効果音が入りそうな顔して一瞬立ち止まった。  
でもすぐ何かに気づいたみたい。  
さっきよりも速くなった。

「ならば今のボクをしかとその目に焼きつけておくれ！」

「もうすでに手遅れなんだよ！賞味期限切れなの！」

そうこうしている間に大介が目を覚ました。

何を思ったか、アイツの上に隕石を落としてくれたよ。

やっぱり虫けらは潰されて死ぬのがお似合いだね。ふふ。

あ、残念虫けらは足をもがれてもしぶとく生き延びるんだった。  
徹底的に叩き潰して燃やしてやるよ。

太一、振り返る。(後書き)

太一は重度のブラコンです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0992t/>

---

異世界の勇者様！？

2012年1月7日12時52分発行